

大阪支部 24年度「春季歴史探訪の会」開催報告

(新旧の歴史を訪ねて京都洛中を探訪)

まだ4月というのに夏日となった好天の平成 24年4月28日(土)、総勢23名(内、ご夫婦3組)が、定刻にガイド氏に伴われて地下鉄「二条」駅を出発。今回は遠路はるばる千葉県からB41小林尚好氏ご夫妻も参加された。

出発してすぐ、かつての平安京の都大路の朱雀大路に面した内裏の正門であった「朱雀門跡石碑」を見て、すぐそばの「出世稲荷神社」へ。ここはかつて秀吉の邸宅であった「聚楽第」の中にあっただが、後にこの地に移され秀吉の出世にあやかりといまだにお参りが絶えないと言う。ここから約10分で「史跡・平安京大極殿跡」へ、さぞかし立派なものだろうと行って見ると、町屋の中のひっそりした児童公園の一角に、少し場違いな大きな石碑が残されているのみである。しかし当時の大極殿の様子は、今の平安神宮に縮小されて再現されていると言い、往時の麗さをしのぶことが出来た。この後世界遺産の「元離宮・二条城」へ、徳川将軍家の上洛時の宿舎として建てられた平城で書院造りの御殿、その部屋々々を飾る狩野派の障壁画や徳川慶喜が大政奉還を決した評議の様子などが、等身大の人形によって見る事が出来る。御殿を出たあと、小堀遠州が設計した特別名勝の庭園を鑑賞して、二条城を後にする。城を出てすぐ城の南に面した「神泉苑」へ、かつては平安京内裏の苑池として広大さを誇っていたが、今はわずかの池泉に当時の面影を残すのみである。池には泉が湧き、竜王を祭るなど水に縁が深く、雨乞いの聖地として知られ、空海が祈ってその靈験があったとか。ここを出て、昼食に向かう途中で、個人住宅では異例の「重要文化財・二条陣屋」前では、現在修理中で中には入れないので説明のみを受ける。上洛大名の宿舎の町屋ながら、内部は忍者屋敷もどきの数々の仕掛けがあるという。

昼食の後は、「壬生寺」の門前近くにある「新撰組壬生屯所跡」で新撰組発祥のいきさつなどを聞いて、隊員などが教練をしたという「壬生寺」へ。寺内には隊士の墓などもあるが、今回の目的は重要無形民族文化財に指定されている「壬生大念仏狂言」の鑑賞である。この狂言は年に十余日しか催されないもので、「ガンデンデン」と鉦、太鼓や笛の囃子のなか、仮面、衣装をつけ身振り、手振りで演じる無言劇である。約七百年も前から、大勢の人に仏の慈悲を伝える宗教劇や、能や物語に題材をとった演目を演じ続けてきたという。今回は「炮烙割り」「賽の河原」「道成寺」などを見たが、なかでも最初の「炮烙割り」はその年の節分参り時に、人々が奉納した名前や願文を墨書した素焼きの炮烙を何百枚も舞台手前の手すりに積み上げ、これらを一気に突き落として割る壮観さが売り物である。

まだまだ見たいのを我慢して、次の元島原遊郭内にある「角屋(すみや)もてなしの文化美術館」へと移動。途中、わずかに残る元遊郭の名残り、入り口の「大門」、置屋の「輪違屋」などを見て、お目当ての「角屋」へ。ここは日本最古の公許の花街の中にある揚屋(あげや)と呼ばれる料亭で、置屋(おきや)から太夫や芸妓を呼んで歌舞音曲の遊宴の場を提供していたもの。唯一の揚屋建築の遺構として、重要文化財に指定されている。格式ある部屋や大きな台所はもちろん、茶席を三つも設けた庭園など見るべきものが多く、財団で保存に努めている。最後は新しく古い「梅小路蒸気機関車館」に入館。わが国唯一の蒸気機関車専門博物館として19輛を保有しており、そのうち9輛が動態保存である。

「デゴイチ」の愛称で親しまれた「D51」の1号機や、美しいスタイルから「貴婦人」と呼ばれた「C57」の1号機などまじかに見て触って、運転席に上ることも出来た。

今回の探訪は京都の洛中を丸太町通(一条と二条の間)から八条通まで、北から南へ徒歩で巡った充実の一日でした。



壬生寺狂言炮烙割り

